提言
2024

舞台芸術の可能性

倉敷市立短大保育学科准教授　**浅野　泰昌氏**

他者への共感力を喚起

大学1年から人形劇の上演を始め、教員として学生と共に劇団を設立したのは2008年のことです。以来、上演を重ねる中で子どもたちのさまざまな姿に出会ってきました。舞台をじっと見つめる子がいれば、上演中に手をたたいたり、立ち上がったり、はたまた自分の思いを口にしたり…。客席の子どもたちは実にダイナミックです。大人からすれば「集中していない」「行儀が悪い」ように見える姿から、子どもも、特に乳幼児には「舞台芸術を見る力がない」と決めつけてはいないでしょうか。

しかし、逆に登場人物の気持ちをわが事のように感じているからこそ心と体が動いているとしたらどうでしょう。自身の感じた喜びやつらさを他者と分かち合うために、音声言語だけでなく、しぐさや振る舞いなどの非言語的なコミュニケーションを使って表現しているのかもしれません。そうだとすれば、登場人物の心の機微をくみ取り、全身で感応しながら作品を味わう乳幼児は素晴らしい観客と言えます。

大人中心の社会を「こどもまんなか」社会へと作りかえる司令塔として、23年4月に「こども家庭庁」が発足しました。背景には子どもや家庭を取り巻く環境の変化があります。「人口動態統計」によると、22年の出生数は77万747人（前年比4万875人減）で、初めて80万人を割り込みました。0～14歳までの子どもの数が全人口に占める割合は、50年以降に10%未満になると危惧されています。少子化が著しく進む中、子どもの側に立った社会の再構築は必要不可欠です。将来を見据えた包括的な対策と共に、今を生きる子どもたちの心身を丁寧に豊かに育むことが求められています。その点で舞台芸術は私の経験からも大きな可能性を秘めていると言えます。

喜怒哀楽の感情に彩られた舞台芸術は、架空の物語でありながら、どこか私たちの人生に通じています。目と耳はもちろん、肌からもその場の空気感や他の観客の息吹を感じながら、私たちは登場人物の人生の一ページに触れて感情移入し、共に一喜一憂します。舞台芸術は心躍る感動のひとときを提供するだけでなく、私たちの日常や社会生活に求められる他者への共感的理解の力を喚起します。

脳科学の研究成果や人形を用いた心理学の実験によって、乳児の時点で既に複数の登場人物の意図や関係性を読み取る力を有していることが示されています。文明が発展しながらも他者・他国との間に軋轢（あつれき）が生じ、争いが絶えない現代社会において、他者の喜びを自分の喜びとして感じ、他者の痛みをわが事のように感じる力を幼少期から高める試みは、地域や世界の諸課題の改善に通じるのではないでしょうか。

楽しくも学び深い舞台芸術は、私たちのウェルビーイング（身体・精神・社会的豊かさ）向上につながります。倉敷には日本屈指の上演実績を持つ「とらまる人形劇団」、少し足を伸ばせば東かがわ市には西日本一の稼働率を誇る「人形劇場とらまる座」があります。今年8月1～4日には岡山芸術創造劇場ハレノワ（岡山市）で「子どもと舞台芸術大博覧会」も開催されます。まずは家族で舞台芸術に触れることから始めてみませんか。

あさの・やすまさ　1981年生まれ。総社高、岡山大教育学部、とらまる人形劇研究所附属人形劇学校パペットアーク卒。岡山大大学院教育学研究科修了。2008年からくらしき作陽大子ども教育学部助教、講師を務め、22年から現職。学生と共に劇団を組織し、これまでに600回以上の公演を行う。倉敷市立短大子どもの劇場顧問。国際人形劇連盟日本センター理事。倉敷市（旧真備町）出身・在住。

©山陽新聞社　無断複製転載を禁じます。